



5月の園だより

太陽の子保育園 平成29年5月号

新クラスでの生活が始まり、子ども達は新しいクラスやお友達、そして先生に慣れてきたようで、笑い声や楽しそうな声がたくさん聞こえるようになってきました。

5月5日はこどもの日、大きなこいのぼりを飾って、大きく元気に育てほしいという願いを込めてお祝いする節句です。太陽の子保育園ではこどもの日会を4月28日に行い、それにあわせて園庭に手づくりのかわいいこいのぼりが泳いでいますのでぜひ見て下さいね。

春でも車内で熱中症に…車の中に子ども残さないで!!

ぽかぽか陽気が心地よくなるこれからの季節は、止めた車の中に閉じ込められた子供が熱中症になる事故が起きやすい時期でもあります。晴れの日でも外気温はそれほど上昇しないため、子どもを車内に残し買い物などに出掛けてしまうケースが多いためです。JAF(日本自動車連盟)などは「強い春の日差しに油断は禁物」と、注意を呼び掛けています。

38.9度まで上昇。「直射日光が当たるダッシュボードが熱源となるため、車内温度の上昇に、車種や外装色、外気温はあまり影響ない」としています。

JAF広報部は「外は涼しいから大丈夫という思い込みが、幼い子どもの熱中症事故を引き起こす原因」と指摘し、「春でも、車内気温は真夏と同じぐらい上昇することを覚えてほしい」と訴えています。

JAFでは4月に、窓を閉め切った車内での温度変化をテストし、その結果、最高外気温は23.3度でしたが、車内室温は最高48.7度、ダッシュボードは同70.8度にまで達したそうです。

4枚の窓すべてを4センチ開けた車では、全閉した車より低いものの、車内温度は最高

外は23℃でも…



車内は49℃!!



結婚しました

べんぎん組の松尾美紀保育士と給食室の皆誠調理師が昨日入籍しました(陽光福祉会で初めての職場結婚となります)。それに伴い、5月より松尾美紀が皆美紀(あさみき)となります。よろしくお祈りします。



5月の予定

- 9(火) 手洗い指導(幼児)
- 10(水) 音楽指導(幼児)
- 11(木) 歯科検診
- 12(金) 職員研修
- 15~19 身体測定
- 16(火) 職員研修
- 17(水) 体育指導(幼児)
- 23(火) 保育参加・懇談会(くま)
- 24(水) 懇談会(ひよこ)
- 25(木) 調理保育(ぱんだ)
- 26(金) お誕生日会
- 29~6/2 職場体験(羽2)
- 30(火) 避難訓練

6月の予定

- 1(木) 保育参加・懇談会(ぱんだ)
- 2(金) 懇談会(うさぎ)
- 5(月) 虫歯予防集会
- 7(水) 音楽指導(幼児)
- 9(金) 調理保育(くま)
- 9(金) 懇談会(べんぎん)
- 14(水) 保健指導(体の話)
- 15(木) 避難訓練
- 19~23 身体測定
- 23(金) 職員会議
- 23(金) お誕生日会
- 26(月) 太鼓指導(らいおん)
- 28(水) 体育指導(幼児)

保育園を支えていただいているの方々

保育園は職員の他に、多くの方々に支えられて運営しています。



囃託医
小児科 道佛 雅克先生(わかさ医院院長)
歯科 井上 雄温先生(井上歯科医院院長)
健診の他、日々の様々な病気・ケガについても、看護師を通して相談のついでにいただいています。

体育指導 長屋 あゆみ先生(日本経営教育研究所)
子どもたちから大人気の長屋先生です。毎月の幼児体育指導の他、職員を対象とした体育指導研修も行っていただいています。

音楽指導 大月 友則先生(music on paper)

音楽指導の先生で、合奏やマーチングなどの指導で全国を飛び回っています。園では幼児クラスでの歌や合奏指導に合わせ、職員研修もお願いしています。

心理・発達支援 澤井 晴乃先生(NPO法人かけはし)
藤原 里美先生(チャイルドフットラの心理・発達面の専門的な観点から、日々の保育へのアドバイスをいただいています。また、職員を対象とした研修も行っていただいています。

カメラマン 宮本 圭さん(OUTDOOR STUDIO)

こどもの自然な笑顔を撮影するのがとても上手なプロカメラマンです。事務所は相模原にあり、いつも行事のたびに車でお越しいただいています。

早期教育をめぐる誤解

乳児保育の基本(フレーベル社)より

執筆 榎原洋一先生(お茶の水女子大学名誉教授・小児科医)

「臨界期」の発見と早期教育

「早期教育」にきちんとした定義はありません。ここでは幼稚園における幼児教育が始まる前の3歳以前から、保護者が意図的に行う教育を狭義の「早期教育」と定義して、話を進めていきます。

早期教育への関心が高いのは今に始まったことではありませんが、近年の乳児の発達に関する知識の普及によって、早期教育への関心は一段と高まっています。

乳児の発達に関するさまざまな発見のうち、とりわけ早期教育への関心の高まりに大きな影響を与えたものとして、「臨界期」の発見があります。

臨界期とは「敏感期」とも呼ばれ、「人や動物の子どもが、ある特定の能力を身につけることができる時期」のことです。この臨界期は乳児期に集中してあるのではないかとこの考えが、早期教育の理論的な背景となっています。

「臨界期」という考え方を後押ししたインプリンティング

乳児期にさまざまな発達の臨界期があるのではないかと、多くの人が抱く考え方の起源の一つになったのが、オーストリアの動物行動学者であるローレンツが発見した「刷り込み現象(インプリンティング)」です。その発見の背景を以下に説明しましょう。



動物好きのローレンツは、放置されていたハイイロガンの卵を、飼育している七面鳥に温めさせていましたが、卵がかえる瞬間に薄い卵膜をやぶる(通常は母鳥が行う)ことを自分でやってみようと思い立ちました。孵卵器の前で夜間に辛抱強く待った末に、ローレンツが卵膜をやぶると、生まれたばかりのヒナがじっとローレンツを見つめていました。ローレンツが卵膜をやぶる「産婆」の役割を終えて、ヒナを母親代わりに七面鳥の腹の下に戻して寝室に帰ろうとすると、そのヒナ鳥が彼を追いかけたのです。

ローレンツは、ヒナ鳥が母親代わりに七面鳥の温かな腹の下にいないで、自分を追いかけてきた理由を考察し、インプリンティング理論にたどり着きました。

インプリンティング理論とは、生まれたばかりの動物の子どもは、最初に目に入った大きな動く物体を母親と見なす、という理論です。その後さらなる研究によって、動物の子どもがインプリンティングを行うのは、出生してから一定の期間内であることが見いだされました。そしてインプリン

ティングが成立するための一定の期間のことを「臨界期(敏感期)」と名づけたのです。鳥のインプリンティングは、人の乳児が主たる養育者(多くは母親)に対して抱く愛着行動と似ていたために、乳児にもインプリンティングが存在し、その時期は生まれた直後の数時間であるという考え方が生まれました。

しかし現在では、インプリンティングは人には存在しないこと、またインプリンティングという現象は、動物界にあまねく見られる現象ではなく、鳥類の一部に見られるだけだということもわかっています。

人の「臨界期」は言語獲得だけ

インプリンティングによって知られるようになった「臨界期」の考え方をさらに推し進めたのは、言語獲得における臨界期の存在です。

言語獲得の臨界期は、最もよく研究された、そして現在のところ人に対して唯一確認されている臨界期です。アメリカの神経科医であるレネバークは、さまざまな原因による言語遅滞を伴う精神遅滞児に言語訓練を行い、言語未獲得の子どもが言語を獲得する可能性があるのは12歳以前であると報告しました。つまり、12歳以降になると、どんな言語訓練を行ったとしても、新規に言語を獲得することは不可能だということです。

レネバークの言語獲得の臨界期についての説を証明するような事件が、1970年代のアメリカで起きました。カリフォルニア州のある町で、乳児期から軟禁状態で人にまったく話しかけられることなく育った12歳の女兒が保護されたのです。現代の表現で言えば極端な「ネグレクト(育児放棄)」です。ジニーという仮の名前で呼ばれるこの女兒に対して、専門家による言語訓練が行われましたが、結果は不十分な言語能力しか獲得できませんでした。レネバークの言語獲得の臨界期説が裏づけられたこととなります。



言語獲得の臨界期についてはさらに多くの研究がなされ、文法の獲得には臨界期があるけれども、語彙の獲得には臨界期がないことが明らかになっています。

このように、インプリンティングは人では証明されておらず、人で確認された「臨界期」は言語獲得だけです。それにもかかわらず、いまだに多くの人が、乳幼児期には人間のさまざまな能力の「臨界期」が存在するから、その時期によりよい教育的刺激を与えれば、その子どもの能力をいくらでも伸ばすことができると考えているのが現状なのです。